

会員各位

一般社団法人 日本現代写真家協会ニュース

過去最高の入場者を迎える名古屋展が終了！

JMPA第4回会員写真展名古屋展が10月9日（火）から14日（日）まで、名古屋市中区栄の中区役所朝日生命共同ビルにある「名古屋市民ギャラリー栄」で開催され、多くの来場者を迎えた無事終了した。今回の展覧会は6月に行った東京展に新入会員の作品4点が追加され巡回展として開催されたもので、期間中の来場者は1200人に及んだ。会場が中区役所のビル内で7・8階が11の展示室に分かれており、写真以外の書や絵画等の展示があった関係から、多くの方が来場したものと思われる。

なお、期間中は愛知県の会員の方々が順番で受付業務に当たった。



子どもたちが大興奮！

豊田アート体験プログラム「ピンホールカメラで写真を撮ろう！」

公益財団法人豊田市文化振興財団及び豊田市教育委員会が主催、JMPAおよび、公益社団法人日本写真協会と中日新聞社が後援した、子どもアート体験プログラム「ピンホールカメラで写真を撮ろう！」が10月13日（土）、豊田市視聴覚ライブラリーで開催され、地元の小学校3年生から6年生の子供達、午前の部18人、午後の部26人が参加した。

JMPAからは地元の原田理事以下、関西地区と関東地区から7人の会員が駆けつけ講師役として活躍した。

今回の催しは豊田市文化振興財団写

真部とJMPAが後押しして実現したもので、子供達一人ひとりが1枚の紙からハサミとカッターナイフを使い、3つの箱からなるピンホールカメラ作りから始め、シャッターとなる針穴を作つて完成。その後、講師の指導のもと暗室内で印画紙を装着、実際に屋外に出て撮影を行った。庭には三脚を6脚並べ各自、自分撮りを楽しんだが子供達は真剣そのもの。午前の部では太陽の下、約2秒の露出時間、午後は太陽が隠れ8秒の露光時間となったが、撮影後、暗室内で現像すると画像が現れ、子供達からは歓声が沸いた。





会場には、大判の4×5ビューカメラも設置され、画像が逆さまに移る様子が見られるようになると、現代のデジカメとは違うカメラの不思議に魅了されたようだ。会場には父兄も同席したが、同じく驚いた様子。当日は2時間の進行で行ったが、約20分オーバーするも、最後に自分の写真を見ると嬉しそうに持ち帰った。



翌日には、原田理事の元に文化振興財団文化事業課からお礼状とともに当日参加した子供達と父兄にお願いしたアンケート調査票も届いた。それによると「また、ピンホールカメラで風景を撮ってみたい」「白黒の写真を撮るのは初めて、先生の話の中で難しいものもあったけど、楽しかったです」「すごいカメラを作れたので楽しかった」、父兄からも「子供が知らない世界を体験できるのは、よい経験になると思います。皆、目がキラキラしていました」「カメラ好きの年配の方が子供達に丁寧に教えてくださっていたので嬉しかったです」「普段デジカメに慣れているので、今回とてもよい経験が出来たと思います」等、多数の意見が寄せられた。理事会では今回の貴重な意見を更に精査して今後の活動に結びつけたいとしている。





フォトシティさがみはら表彰式に出席して… 記：渋谷隆（会員番号007）

10月13日（土）相模原市総合写真祭「フォトシティさがみはら2012」の写真コンテストの表彰式があり、JMPAも後援団体の一員として出席した。

今年度はプロの部では北島敬三氏が「2012さがみはら写真賞」に選ばれました。また「さがみはら写真アジア賞」ではシンガポールの女性写真家Ying Ang（イン・アング）さんが選ばれ、「さがみはら写真新人奨励賞」では今年も女性写真家古賀絵里子さん、笹岡啓子さんのお二人が表彰を受けた。

今までのさがみはら写真賞・さがみはら新人奨励賞は



若い写真家の登竜門であり、さがみはら写真賞を受賞された方々は現在の日本の写真界で活躍されている写真家である。またアマチュアの部では全国からの応募が有り、応募者1101名、応募作品は4383点にものぼり、今の時代を反映した作品もあり非常にレベルの高いコンテストだ。

表彰式終了後パネルディスカッションがあり、写真年鑑編集長河野和典氏の司会でさがみはら写真賞を受賞された北島敬三氏、2012年度の日本写真作家賞を受賞された石川梵氏、2011年度の木村伊兵衛賞を受賞された田附勝氏の3名が参加された。この方々はもう既に写真界で作家活動をしていろいろなところでその名前を見る事が出来る方々である。

写真家というのは大体弁の立つ人は少ない、そして個性豊かな人が多い。元々写真とは作家が描いている事、考えている事を写真という表現手段で見る人に伝えるものであり、能弁であるにこした事は無いでしょうが必ずしもその必要は無いだろう。3氏の今までの作品を先に見ながらその説明、なぜこの様な写真を撮ったかなどの話が有り、それぞれの写真に対するスタンスを話してもらいながら話は進んだ。石川梵氏はこ



の地球における人間のいきざま、自然の中でどのように生きてきたか、その原点を求めて写真を撮ってきたという。あの高いヒマラヤも空の上から見れば地球のしわであるにすぎない、その中で人間はどの様に生きてきたかを追い求めている事を表現しようとしている。例えば南海の島で生きる人は、生きる為に海で漁をする、その最大のものはクジラ漁である。クジラを追い求めてクジラの心臓に銛を打ち込む、人間とクジラとの死闘である。大きなクジラの為に命を落とす事もある。壮大なクジラ漁だがクジラからすれば人間は



敵である、石川氏の撮った作品の中に血で赤く染まった海水の中でクジラの目が写っていた。石川氏によるとその目は憎悪に溢れていたと言う。人間が生きると言う事はまさにそういう事である。



昨年の東日本大震災の時もいち早くヘリコプターで現地に入ったが、まさに行きをのむ惨状だった、特に釜石の大川小学校では津波により 74 名の死者を出したが息が詰まる思いだったと言う。さがみはら写真賞の北島氏は人間の生きて行く上で住む為に家が建ち、町ができる、更にはビルが建つ。だが、その裏で忘れ去られたものもある。今回のさがみはら写真賞「ISOLATED PLACES」はその無機質な空間であり、人間の歩いた足跡の様な忘れられた空間である。そこに人影はなく、その存在すらも忘れられようとしている。それを作った人

までもその事を忘れているまさに隔離された「Isolated」の場所である。そこは至るところに存在する。その事を北島氏は言いたかったのであろう。

3人目の田附氏は主としたテーマを東北とし、デコトラ（デコレーションを施したトラック）に乗車した事から始まり東北に取り組んだ。田附氏は未だ比較的若いので前の2氏ほど問題を突き詰めてはいないようだが、田附氏の言う社会的には決して上層の人たちではないがそのプライドを持って仕事に当たる様の表現、また下北のイタコの存在、など人間の生きる様に大きな関心があり、人間の有り様をテーマとして表現して行きたいと言う。

中でも石川氏の撮った血の海の中の憎悪に満ちたクジラの目は未だ私の眼のまえにちらつく。約2時間、時間がアップという間にすぎてしまったが、沸々と溢れ出る3氏の思いが伝わってきた。このように 2012 フォトショウさがみはらの表彰式とパネルディスカッションは終了した。

茨城県立つくば美術館

「ビジュアル・コミュニケーション展」を終えて…

記：杉浦優子（会員番号 027）

わたしも所属するビジュアル・コミュニケーション研究会は、7月10日（火）～16日（月）まで、茨城県立つくば美術館にて「ビジュアル・コミュニケーション展～experiencing～」を開催。この研究会は、日本大学芸術学部の写真学科を卒業したアーティストたちで構成され、それぞれ、写真、インスタレーション、映像などで制作した作品を展示しました。

会場へは浅古会長をはじめ、萩原理事、福井理事、小泉会員がおいでくださいり、また、ご意見ご感想

を賜り、誠にありがとうございました。浅古会長から、「日頃、我々が流されてしまって表面的にしか捉えていないものを、皆さん深く掘りさげられていて、とても考えさせられました」とのご感想をいただき、我々若手作家一同、とても心強いお言葉と受けとめました。



重要な問題などをきっかけにしているため、直接お話しする中で共感を得ていただける方も少なくありませんでした。

展示の最終日には、フォトアーキビストとして活躍されている大日方欣一さんをゲストにお招きし、作家7人とのアーティストトークを開催。わたしも人生初のアーティストトークに参加しました。緊張の中で自らの写真について語る機会を得て、伝わっているかどうか、不安にも感じましたが、トーク鑑賞者の方から、「作品の意図がとてもよく分かりました」とわたしがテーマとした「故郷」についての意見を交換することもできました。

展示やアーティストトークを通じて感じたことは、もっと作家と鑑賞者が活発に交流しあえる機会があればということ。展示の副題にもある“experiencing(=経験すること)”は、「作家の経験」したことだけではなく、「鑑賞者の経験」や、この「展示で得た経験」も、副題の意図に含まれていると考えています。作家だけでなく、鑑賞者にとっても新たな視点の得る機会となって、浅古会長のお言葉にあつたように、身近な問題への関心を持つことや、それらへの優しさを再考し、それぞれの明日への進展につながれば、この展示の実りと考えています。

杉浦優子会員所属「ビジュアル・コミュニケーション研究会」主催

「ビジュアル・コミュニケーション展」を観て…

記：萩原保雄（会員番号003）

茨城県つくば市にあるつくば美術館で7月10日（火）～16日（月）まで「ビジュアル・コミュニケーション展～experiencing～」は開催された。周辺は学園都市に相応し、広々として気持ちが休まる環境のもとにつくば美術館は建築されている。

会場内では落ち着きの有る空間を利用して、日本大学芸術学部OBで構成されている「ビジュアル・コミュニケーション研究会」の作品が数多く展示されていた。初日の午前11時に会場を訪れ受付の方に挨拶をして会場に入ると、浅古会長・小泉会員（茨城県）が早々と写真展を観覧しており、出展者の杉浦会員が各写真家の作品を1点1点細かく説明をしていた。この展覧会には若手写真家14名が出展しており、作品の内容としては被写体に対するカメラワークやポジションは各自さまざまな捉え方であるが、各自数点以上の展示方法での自己表現は動機がはっきりしていて、風潮で有ろう若い写真家の独特な内面的感性での作品展となっていた。

展示方法は、それぞれのプリントサイズ（四切～メーター幅）を額・板パネル・壁面への直接ピン止め等まちまちだったが、それぞれの作品の内容にマッチした印象が残る手法を取っていた。

この度のビジュアル・コミュニケーション（視覚伝達）展は終了したが、役割を果たした杉浦優子会員のこれからへの活躍を多いに期待したいところである。

図書館も隣接されるつくば美術館では、展示と知らずに立ち寄られる方もおり、「写真だけ見ては、ちょっと理解が難しい」「キャプションを読んだり、話を直接聞いたりすると、面白くなっていますね」などのご意見が多数でした。作品は、福島の震災をテーマにするもの、ヒロシマの被爆者と被爆3世である孫との手紙のやりとりを映像と写真にしたもの、人間の「嫌い」という感情を問い合わせ直そうと制作したものなど、作家が生きていて感じる些細でも身近で、

岡崎達郎会員写真展無事終了…

8月24日（金）～30日（金）富士フィルムフォトサロン大阪で開催され、JMPAも後援していました岡崎達郎写真展「Sail」は、3000人を超える入場者があり、好評のうちに無事終了したとの報告を頂きましたのでお知らせ致します。



写真と俳句

記：十川徳男（会員番号041）

写真と俳句は共通点が多く、写真を撮り始めた時感じたことは、作品作りに対しどちらも引き算で、如何にシンプルにまとめて表現することなのかと思いました。俳句は五七五の十七文字の中に感情を凝縮させて表現する最短詩であり、僅か十七文字が広い大きな意味を持つ訳は、多くを云つてあるからではなく、むしろ少なく云つてあるからであります。

また、俳句はものの全体を云うのではなく、その一端を叙して全体を思はずものです。ものの全体を思はず一端を如何に切り取り、如何に少なく云うかに俳句の急所があり、それが習練の過程ですが、優れた句を読む時は、幾千語でも云えぬ事を何の無理も無く、少ない言葉で云い得ている事に気が付くものです。写真も同様に余分のものを入れる（取り込む）と、表現意図がどこに有るのかが明確に伝わらないので、俳句と同様にシンプルにまとめて表現しなければならないのではないかと感じております。俳句も最短詩で情景と思いを如何に表現し伝えられるかがポイントですので、本当に似通ったところが多く感じられます。

二十数年前、クラブ写真展にて作品に俳句を短冊に書いて添え出展しました。ご来場頂きました他のクラブの方から、これは自己アピールする為の目的になり、写真展には邪道であると批判されたことがありましたが、私はその句によって作意の説明にもなると考えました。

現在ではフォト俳句が番組としてNHKでもテレビ放送をされることもあり、本当に写真と俳句は密接な関係が有るよう思います。

俳句はその言葉から色や形を想像できますが、写真も想像できる要素の豊かさがどれだけ有るか否かで、物語を連想できるのではないでしょうか。その事を肝に銘じて写真の勉強をしておりますが、いざ現場では中々思い切った切り方が出来ず、ファインダーを覗くと作意を忘れ、あれもこれも魅力を感じ、周りの多くを入れ過ぎ、仕上がってみると意図と違った作品が多いので、今後は現場でとっさに処理できる技量を養いたいと思っております。



五月雨や 古刹山門 ぬらしおり
桐水

BSフジ「絶景 旅の時間」 シリーズ 絶景百名山

「苗場山・秋」飯塚英春会員が特集されました…

第24回 「苗場山・秋」

日本でここだけの景観…といつても決して過言ではない絶景を持つ山、それが、信州と越後にまたがる名峰・苗場山（標高2415m）。その絶景をなすのは、特異な形の頂上に展開される、南北4キロ・東西1キロにおよぶという大湿原。春から夏には色とりどりの高山植物が咲き誇り、秋には黄金色の草もみじと鮮やかな紅葉樹に包まれる。まさに苗場山ならではの他に類を見ない高層湿原。



そのとりこになって38年、ずっとカメラを向け続けた地元の写真家が飯塚英春さん。自らの写真集の中で、苗場山の山頂湿原を“天空の楽園”と名付けた飯塚さん、しかしその写真集にはなぜか、山の作品と共に、山麓の寒村・秋山郷の村人たちの頑張りや笑顔も一緒に映し出されていた。

今回は、飯塚さんと共に新潟県側、長野県側のふたつのルートから苗場山に登り、紅葉の大湿原の絶景を堪能、同時に、切っても切れない苗場山と秋山郷の人々との温かくも厳しいつながりをお聞きする。



（文章は番組サイト、写真は番組キャプチャーです）

http://www.bsfuji.tv/tabinojikan/hi/zek100_24.html

JMIPA

一般社団法人
日本現代写真家協会

〒606-8412 京都市左京区浄土寺馬場町55
Tel 075-708-6108 Fax 075-708-6118